

# 大学一年次における留学生への 作文教育

—— 基本的伝達能力の再考 ——

小笠原 典子

## 1. はじめに

外国人を対象にした文章表現学習は、音声で表現できるものをそのまま文字化したり、学習した文型を使って短文の作成を行ったりするという初級段階からはじまる。そして、接続の表現を用い、単文をつなぎ、あるトピックについてまとまったものが表現できるようになるまで段階をおって進められる。その後、中級・上級段階に進み、大学に進学すると、レポートおよび論文作成に関する学習が主に行われる。

大学という枠の中に留学生が入ると、学生も、教員も、日本語のレベルとはかかわりなく、文章表現の授業にレポートや論文の作成法の学習を求める傾向が強くなる。一年次からレポート提出という課題があるため、レポート作成法の学習は確かに必要なものである。しかし一方で、留学生が日本語で表現した文章は、レポートの形式はとるものの、一文一文が正確に書かれていないため、内容が読み手には伝わらないという事態を多く引き起こしている。

文章表現教材の多くは、第一段階として、あるトピックについて自分の意見を「述べ」、それを「書く」という方法で、「複数の段落で構成される文章を書くこと」を目標に作られている。そして次の段階で、「レポートおよび

論文作成技術を学ぶこと」を目標にしている。当然のことながら、「話す」「聞く」「読む」「書く」という基本的な日本語能力は十分に習得されているという前提で教材は作成されている。だが、この前提は果たして妥当なものであろうか。

また、基本的な日本語力が身につけていない学生、あるいは学習したものが部分的に抜け落ちている学生をどう指導すればよいか。本稿では、本学学生の書いた誤用文を事例として取り上げ、その誤りを分析し、「意図することが正確に相手に伝わる文章を書く」ために、どのような授業が必要か、教材開発を視野に入れながら検討していきたい。

## 2. 外国人を対象にした日本語文字教育

### (1) 日本語学習と文字教育

外国語を学習する場合、特に初歩の段階では、対象言語を「聞いて、話す」という繰り返し練習が重要である。

母国語を習得する場合、乳幼児が、その言語を使って他者とコミュニケーションが取れるようになる過程では、言葉を「聞いて、まねをして、自ら発する」という繰り返しを行っている。そして、構文上の規則を何らかの方法で組み立て、理解し、未経験の新たな場面においても、意図することを言語で表現できるよう、その規則を応用していると推測される。

成人が新たに外国語を学ぶ場合はどうであろうか。「外国語を翻訳すること」が学習目的であれば、「読む・書く」の学習を重視して行えばよいであろう。しかし、外国語を、特に外国人が日本で日本語を学習しようとする場合、最終目標はさまざまであるが、共通する目的は学習言語（日本語）を使って他者とコミュニケーションをとることであろう。

コミュニケーションの方法には、音声表現によるものもあれば、文字表現によるものもある。このコミュニケーション手段を習得するための基本は、幼児が言語を獲得する過程で行う言語学習サイクルであろう。新しい言葉、文を聞く。次に自分で実際に同じ音を出し、自分で出した音をまた聞く。音を聞いて、自分で発して、それをまた聞く。この繰り返しが学習の基本にあるだろう。文法書を読み、文章を理解するという学習だけでは、言語による

コミュニケーション技術、特に音声表現技術を身につけることはできない。初期の段階ではとりわけ「聞く・話す」練習の繰り返しは重要である。

では、「読む・書く」学習は初歩の段階では必要ないか。成人の場合、文字をまったく使用しない学習は効率が悪い。重要なことは文字学習を行う時期と比重である。「聞いて・話して・また聞く」訓練が完成したとき、学習した構文を文字で記録することは大切である。自分が発した音を正確に記録できなければ、次にそれを発するときには正確にできないからである。ただ、こうした文字での書き表しはあくまで学習項目の確認のためであり、書くことに集中してしまうと、音の「入力・出力」のトレーニングの際にはむしろ邪魔になる。「聞く・話す・記録する」という練習を続けることで学習項目が習得されていくのではないだろうか。

中級・上級段階に学習が進み、すでに基本的な構文を学習しているにもかかわらず、わかりにくい、不正確な文を話したり書いたりする学生が多い。その原因は何か。初級の段階では、音声学習で得た日本語力と文字学習で得た日本語力をほぼ同じ水準に保つことが可能である。習得したことがそのまま音声化・文字化できるのである。しかし、次の段階に進むと、学習する内容と自分が使いこなせる内容のバランスが、質、量ともに崩れてくる。学習すべき項目が多いため、それらを保持し、必要に応じて取り出し、音声化あるいは文字化することが困難になる。理解できることと運用できることのギャップが大きくなるのである。

中級段階以上でも文字学習の基本は学習した構文を使って書くことであるが、各構文について丁寧に練習を行う余裕はない。初級段階に比べ、新たに学習する事柄が膨大な量になるからである。そこで「理解」と「運用」のギャップを埋めることができる的確な指導と教材が必要になってくる。

## (2) レベル別の教育内容

では、実際に初級、中級、上級でどのような文字教育が行われているか、代表的な教材の目標、学習内容を整理し表1に示す。

〈初 級〉

表1 初級の作文教材

| 段階  | 目 標            | 内 容                                    | 学 習 時 間      |
|-----|----------------|--|--------------|
| 前 半 | 文型の定着          | 語彙・文型練習<br>短文完成・短文作成など                 | 0～150 時間程度   |
| 後 半 | 文型の定着<br>段落の展開 | 語彙・文型練習<br>短文完成・短文作成など<br>*身近な話題について書く | 150～300 時間程度 |

\*身近な話題 — 「自己紹介」「私の国・町」「私の好きなもの」「日本の〇〇について」など

【初級前半】

文字教育にどれだけの比重をかけるか、また、指導に際してはどのような教授法を用いるかをめぐってはさまざまな意見があるが、初級段階では音声教育（話す・聞く）を中心に基本文型を学習し、学習した内容を確認するために文字で記す作業を行うことが重要である。

初級前半では使える日本語が限られているため、学習した文型を文字で表すことが中心になる。そして、文型を正しく定着させ、発音と表記の関係を整理し、正しく発音できているか確認を行う。

この段階での学習項目が正確に習得されていると、次のような作文を書くことが可能である。各文の文型はすべてこの段階の学習項目である。

文例1

初級日本語「げんきⅠ」より

私は毎日七時に起きます。うちで朝ごはんを食べます。八時に大学に行って、九時から日本語を勉強します。十二時半に大学の食堂で昼ごはんを食べます。六時ごろうちに帰ります。晩ごはんを食べてから、少し勉強します。たいてい十一時ごろ寝ます。

文例2

初級日本語「げんきⅠ」より

金曜日に日本人の友だちと公園に行きました。公園で友達と話しました。それから、レストランに行きました。土曜日は一人でお寺に行きました。店がたくさんありました。店でおみやげを買いました。

【初級後半】

初級後半になると、学習した文型も蓄積され、語彙も増えてくるが、基本的には初級前半段階と同様の練習が続けられる。初級が終了するころには、身近な話題についてある程度まとまったもの（200字程度）が書けるだけの文型・語彙は学習されている。

この段階までの学習項目が正確に習得されていると、次のような作文を記すことが可能である。

文例 3

初級日本語「げんきⅡ」より

私は日本料理が大好きです。特にすき焼きや焼き鳥が好きです。私の国では日本料理は安くないから、あまり食べられませんでした。いま、毎日食べられるので、とてもうれしいです。

日本にはめずらしい食べ物がたくさんあります。のりやうめぼしなど国で見たことがありませんでした。私はめずらしい食べ物に興味があるので、おいしそうな食べ物は何でも食べてみます。これからももっといろいろな食べ物を食べてみたいと思います。

〈中 級〉

表 2 中級の作文教材

| 段階  | 目標・目的                                    | 内 容   | 備 考          |
|-----|--|---|--------------|
| 前 半 | 初級文型の定着<br>抽象語彙の習得<br>* 慣用句の運用<br>段落文を書く | 原稿用紙の使い方<br>話し言葉・書き言葉<br>文体の認識<br>身近な話題について書く     | 300～450 時間程度 |
| 後 半 | 既習文型の定着<br>段落展開の完成                       | 文体統一の徹底<br>意見を述べる<br>抽象的な話題について<br>段落構成練習<br>要約練習 | 450～600 時間程度 |

\* 慣用句 ―～につれて・～に際して・～ではないかななどの機能語表現

【中級前半】

中級段階のはじめでは、初級の学習項目が正確に身につくように、必要に

応じて短文を書く練習も行われるが、その時間は限られている。この段階に入ると、学習する語彙数は急激に増え、抽象語の割合も増してくる。初級段階では、口にできる文を文字化するという練習に重点が置かれてきたが、中級で新たに加わる学習は、話し言葉と書き言葉の区別である。「常体」「敬体」などの文体の区別を学び、「～ね」「～だよ」などの終助詞や「～しちゃった」「～じゃない」などの省略形など、話し言葉特有の表現について、場面に応じた使い分けができるように練習する。また、身近な話題について、初級の語彙・文型の範囲を出て、書き進めることができるよう学習を続け、限られた時間内に300～400字程度の文章が正確に書けるようになることを目標としている。

この段階で学生に自由に作文を書かせると、短文を並べることはできるが、テーマについて話を展開させて書くというレベルに到達していないことが多い。もっとも、文章構成力の問題は外国語学習というより、母語での作文能力と深く関係している問題であろう。

まとまりがなく、ただだらと書いているだけの文章であっても、一つ一つの短文が正確であれば、自分が述べたい内容を相手に伝えることはできる。正確さに欠け、脈絡のない文章はただの文字の連続にすぎないが、実際にこういう文例は多い。

ここまでの学習項目が正確に習得されていれば、以下のような作文を記すことが可能である。

#### 文例 4

「日本語作文 I」より

私は日本に来てからずっと東京に住んでいます。東京は人も車も多くて、電車も地下鉄もこんでいます。でも、とても清潔な町だと思います。自然は少し少ないですが、スーパー、コンビニ、レストランなどがたくさんあって、交通も大変便利です。

東京は世界で一番物価が高い町だといわれますが、安全だし、何でもあるので暮らしやすい町だと思います。確かに家賃は高いですが、地下鉄や電車の線が多いので、車がなくても困りません。

東京は広いので、まだ知らないところがたくさんあります。休みの日には、いろいろな新しいところに行ってみようと思います。

文例 5

「日本語作文 I」より

アメリカでは自動車が普及している。ニューヨークやサンフランシスコなどの大都市を除いて、交通があまり発達していない。たいていの家には車が2~3台あって、通学や通勤、買い物などに使われる。車は生活に絶対必要なものだ。

車が普及しているから、もちろん道路も広くてとてもいい。アメリカの高速道路は日本と違って無料だ。車があればどこにでもいける。

しかし、いいことばかりではない。交通事故は大きい問題だし、排気ガスなどの公害の問題もある。だから車の使い方をよく考えなければいけないと思う。

初級を終了し、中級に進んだばかりの段階にある留学生が、どのような作文を実際に行ったか、以下にあげる。それぞれ3ヶ月間、本学留学生別科において初級後半のクラスを終了した後、中級前半のクラスに進級し、その後すぐ書かれた作文例である。

留学生の作文例 A

「日本の生活について」

日本へ来る前、日本の生活が大変だと思います。来てからやっぱり大変だった。毎日とても忙しいです。勉強をしながらアルバイトをしています。

忙しいですが、楽しいです。学校で日本語を勉強するのは難しいですが、勉強すれば勉強するほどおもしろいです。

日本の物価は高いで、大変です。でも、もっと日本について知っていますから、日本の文化や経済など、自分の経験にいいと思います。

— 後略

留学生の作文例 B

「日本の家族について」

私は日本に来た前に、いろいろな国のことが知りたいだから、たくさん本を読みました。日本では男性が仕事をよくがんばるですが、でも、仕事を終わったら、うちに帰らなくて、いろいろな場所に遊びに行きます。結婚したの女性がぜんぜん仕事しないで、うちにご主人のためにい

ろいろなことをします。

— 後略

留学生の作文例 C

「休みについて」

中国で休暇の時間は前より長くなりました。ですから、そんな時間に旅行に行く人が増えています。新聞とニュースによると、車とか飛行機とか旅館が込んでいます。

こんなことはいいと思います。心理を調節すれば、いろいろな見識も増長します。みんな毎日毎晩同じことを繰り返すと、心理は緊張しています。そしてとてもつまらないです。

それから、地方によって、風俗習慣が違いますから、もし、よく外に旅行に行ければ、いろいろなところの違うのことをよく知っています。そうすれば人間関係をうまくいきます。そのほかに旅行業の経済の発展にいいと思います。

とにかく、休暇の時間を生かして、いろいろなことをやって知識を身につけるようになりました。そして人間関係がうまくいきます。ですから、私は仕事が無理しないときどき外に遊んだ方がいいと思います。

### 【中級後半】

中級前半と同様の練習を続けながら、自分の意見を述べ、起承転結の段落構成を作る練習を行う。さらに、抽象的なテーマについても自分の考えを正確に表すことができるように訓練し、次のステップへの準備を行う。

この段階まで学習が進むと、以下のような作文を記すことが可能である。

文例 6

「日本語作文Ⅱ」より

私の国アルゼンチンでは大学を卒業してタクシードライバーになることも珍しくない。国では自分が希望する仕事を見つけることができずに、タクシーを運転しながら、よい仕事が見つかるチャンスを待っているのだ。もちろんタクシードライバーも立派な仕事だが、自分が大学で勉強したことを生かすことができないのは残念なことだ。私も大学で政治学を専攻したが、国では就職できず、日本に留学した。

日本の企業では多くの外国人が働いているそうだが、普通の留学生に



## 大学一年次における留学生への作文教育

は就職するチャンスはないと思う。日本の企業は、各国の有名大学を卒業した人を選び、日本語能力が高いことを望んでいるからだ。日本の企業は学歴を重視していると思う。そのことがいいことか悪いことか簡単にいえなと思うが、学歴を重視することで、大学の受験競争に影響を与えているといえるのではないだろうか。

では、中級後半レベルに在籍している留学生は実際にどのような文章を記しているだろうか。以下の書き手は、本学留学生別科の中級前半クラスで3ヶ月学習し、その後、中級後半クラスに進級した学生である。引用が長くなるが、学生の書いた誤りを全体の文の流れの中で捉えてみたい。

### 留学生の作文例 D

#### 「日本の会社員について」

日本の経済はとても発達した原因は、日本人の一生懸命の働いている精神のおかげだ。日本人は自分の会社の成長するために残業代がなくても、一日で長い時間まじめに働く。それに、普通の日本の会社で、もし社長とか課長などは会社を離れなければ、一般の会社員も会社を出られないというルールを聞いたことがある。現在、別々の会社はお互いの競争が激しいだ。そうすると、みんな自分の会社の利益が第一位として、頑張らなくてはならない。

中国は社会主義社会である。たくさんの会社は国に属する。国から仕事を支配する。それで、競争は社会で存在ではない。それに社会の業績は自分の給料とぜんぜん関係ではないから、会社のみennaにとって圧力がなくなった。仕事をするときのんびりしている、仕事の終わる時間になって、さっさとみんな家に帰る。夜10時の後、バスとか地下鉄とか乗るとき、だいたい会社員が見えない。でも、日本では12時でも仕事が終わったばかりの会社員も見える。これは日本と中国の働く現状の区別だと思う。

— 後略

### 留学生の作文例 E

#### 「電話と手紙」

生活の中で連絡するために電話を使っている。もし、用事があって電

話をかけると、相手に早く伝えられる。とても便利だと思う。もし、電話がなければ、できるだけ早く相手のところに着くにもかかわらず、間に合わないでしょう。

— 後略

## 〈上 級〉

表 3 上級の作文教材

| 段階  | 目標・目的          | 内 容   | 備 考           |
|-----|----------------|---|---------------|
| 大 学 | レポート作成<br>論文作成 | 原稿用紙の使い方<br>話し言葉・書き言葉<br>文体統一<br>段落構成<br>* レポート作成練習 | 学習時間 600 時間以上 |

\* レポート作成練習：レポート・論文作成に関して、独立して扱う教材が多く、次のような構成で作られている。

各構成要素の学習 — 序論 課題の提示

本論 定義・分類／資料の読み取り／同意・反論・検証

結論 考察・結論の提示

日本語学習時間 600 時間は何を示すか。1 学期 12 週間で、1 週間に 20 時間学習を続けたとすると、1 学期で 240 時間を学習に費やすことになる。つまり 1 年から 1 年半で中級段階を終了し、上級に進むことになる。日本国内で 600 時間以上日本語学習を続ける外国人の大半は学生（専門学校・大学・大学院）であるため、上級の文字教育教材の対象はこうした学生に絞られる。

これほど留学生が多くなかった時代、教材の対象は「読む・聞く」力が中・上級レベルに到達しているのに、「書く」力が大学で求められる段階に到達していない学生であった。従って、教材は大学で要求される期末試験での論述問題に答えること、レポートを作成することなどに対応できるように構成されていた。

留学生の数が多くなった現在でも、上級段階の文字教育教材はこの流れを受け継ぎ、最終目標は、レポート作成・論文作成ができる力を身につけることにおかれている。

この段階までの学習項目が正確に習得されていれば、以下のような作文を記すことが可能である。

文例 7

「日本語作文Ⅱ」より

今、日本語の学習が世界各国でブームになっている。特にアジア各国での学習熱が高く、海外日本語学習者の8割を占めている。日本国内の留学生もアジア人が多く、私の学校のクラスメートも大半が韓国や中国からの学生だ。

よく、日本語は難しいといわれる。たしかに学習するほど難しくなり、毎日の勉強が大変である。しかし、反面、やさしい点もある。それは発音だ。たとえば日本語の母音は5つ、子音は13か14である。それに対して、私の国では母音が21、子音が19もある。発音の点から見ると、日本人が韓国語を学ぶより、韓国人が日本語を学ぶ法がずっとやさしいと言える。

だが、問題は書き方である。日本語には漢字、仮名、ローマ字がある。また、いくら母音と子音の数が少なくても、正しく発音ができなければ、正しくかけないと思う。

一見、やさしそう思えるが、外国語の学習というのは簡単にはできないものである。

以下に示す文例は、本学留学生別科で1年学習の後、社会情報学部に進学したばかりの学生が書いたものである。

留学生の作文例 F

「独身貴族」

社会の進歩につれて、今、若者の独身化が進んでいる。日本では、特に80年代以降、若い人が、結婚しない人がどんどん増えている。それによる少子化など社会問題をもたらした。今、社会で流行している呼ぶ方の独身貴族が、もちろん、独身になったら、貴族のような生活ができるという意味だった。

どうして現在の若者はこんな不思議な考え方を持っているのだろうか。発展した社会から見れば、たぶん今の人々は経済開放につれて思想がだんだん変わっている。今の若者は、昔の伝統的な保守意識を持つことなく、自由で開放的で、個人的な意識を持っている。二人で一緒に生活をしているとき、個性を持っていて、お互い譲らないこと、二人の感

情がうまく続けないから、自由な生活をできるために独身になってしまったのだろう。 — 後略

以上の文例から明らかなように、どの学習段階においても、「その段階で求められる作文能力」と「学生の作文能力」にはかなりの開きがある。この点に関する分析、検証は後項に譲ることにしたい。

### 3. 留学生の誤用例とその原因

#### (1) 留学生によく見られる誤り

現在使用されている主な教材について、すでに述べてきたが、留学生によくある日本語の誤り、また、本学留学生の誤りの傾向を分析し、今、必要な教材について検討を進める。

まず、一般的に留学生がどのような誤りを犯しやすいか、項目別に整理する。

#### 発音に関係する誤り

正確な発音が身につけていないことが原因となる表記の誤りである。

表4 発音に関係する表記上の誤り

|          | 誤りの内容  |
|----------|--|
| 促音<br>長音 | 「がっき(学期)」を「ガキ」, 「ろくじ(六時)」を「ロックジ」というように、誤った発音を身につけ、それをそのまま表記する。一方で、漢字圏の学習者は「物価」について「ブカ」と発音認識していながら、漢字であれば「物価」と書くことができる。 |
| 長音<br>短音 | 「きのう(昨日)」を「キノ」, 「りょこう(旅行)」を「リョウコウ」と、誤った発音を身につけ、そのまま表記する。漢字での表記は正しいことが多い。   |
| 清音<br>濁音 | 「だんせい(男性)」を「タンセイ」, 「さいきん(最近)」を「サイギン」と発音し、そのまま表記する。漢字表記は正しいことが多い。   |
| 拗音<br>撥音 | 「あんない(案内)」を「アナイ」, 「くじ(九時)」を「キュウジ」と誤って発音し、そのまま表記する。漢字表記は正しいことが多い。   |
| 調音法      | 「だんぼう(暖房)」を「ランボウ」と誤って発音し、そのまま表記する。漢字表記は正しくできることが多い。  |

## 大学一年次における留学生への作文教育

### 構文・文法に関する誤り

基本文型を正確に身につけていないために生じる誤りには、以下のような典型的なものが見られる。

表5 構文・文法に関する表記上の誤り

| 誤                     | 正                       |
|-----------------------|-------------------------|
| 時間がない，しないい。           | 時間がなければ，しなくてもいい。        |
| 技術が進歩するにしたがって，生活が便利だ。 | 技術が進歩するにしたがって，生活が便利になる。 |

### 語彙に関する誤り

語彙を誤って習得したり，また，和語と漢語の使い分けが適切でないためおこる誤りで，違和感のある文になる。

表6 語彙に関する表記上の誤り

| 誤                     | 正                     |
|-----------------------|-----------------------|
| 買い物を買うとき，クレジットカードを使う。 | 買い物をするとき，クレジットカードを使う。 |
| 毎日学校で，多種の授業を受けている。    | 毎日学校でいろいろな授業を受けている。   |

留学生によく見られる誤りを大きく分類してきたが，このほか文体の誤り，話し言葉と書き言葉の混在などの問題も多くある。また，留学生に共通して言えることは，同じ間違いを何度でも繰り返すという点である。

### (2) 本学留学生の事例

本学留学生別科および社会情報学部の留学生によく見られる誤りの一覧である。これは本学留学生に限らず，一般に日本語学習をしている外国人によく見られる誤りでもある。

表7 表記上の誤用の形態

| 分類  | 形態    | 関 連 項 目                |
|-----|-------|------------------------|
| 構 文 | アスペクト | する・した・している など          |
|     | ヴォイス  | 受身文・使役文・使役受身文 など       |
|     | 慣用句   | ～について・～とともに など         |
|     | 接続の形  | 接続詞・接続助詞など             |
|     | 名詞修飾  | 名詞を修飾する形               |
|     | 助詞    | いろいろな助詞の使い分け           |
|     | 文のねじれ | 文頭と文末の一致               |
| 語 彙 | 漢語    | 日本語にない漢語・漢語の誤用など       |
|     | 和語    | 和語と漢語の使い分け             |
|     | 副詞    | 副詞・副詞的表現など             |
| 文 体 | 常体・敬体 | 文体の一致                  |
|     | 文末処理  | ～ではないだろうか・～ということになる など |

では、実際の学生の誤用例を取り上げ、どのような教材を使い、どのような学習を進めるのが効果的であるか、検討を行う。誤用例は、本学留学生別科の中級前半クラスの学生と、本学社会情報学部一年生の作文から一部引いた文である。斜体文字は留学生の書いた文で、その下段は、既習の構文・語彙を使って、できるだけ意図するところに沿い、学生の表現を生かして訂正を加えた文である。

—留学生別科中級前半クラス—

例1 ストレスを溶解できるように大人はマンガを読むことを選ぶと思っている。

⇒ 私は、ストレスを解消するために大人はマンガを読んでいると思う。

例2 私は日本に来てから、あちこちマンガを読んでいる人が多いの現象を見えています。

⇒ 私は日本に来て、あちこちでマンガを読んでいる人をよく見か

けました。

- 例3 私は去年の9月に日本の生活をはじめました。  
⇒ 去年の9月に日本で生活が始まりました。
- 例4 時間がたつにつれて、政府は多い人口が注意された。  
⇒ 時間がたつにつれて、政府は人口が多いことを問題にするようになった。
- 例5 最近、小学生でさえ親に留学させます。  
⇒ 最近小学生でさえ、親に留学させられます。
- 例6 結婚したからといって、子供が生まれることをぜんぜん関心しなかった。  
⇒ 結婚しても、子供を生むことにぜんぜん関心を持たなかった。
- 例7 日本であり、中国であり、みんな自分の問題が存在しています。  
⇒ 日本にも、中国にもそれぞれの問題が存在しています。
- 例8 社会の高速発展につれて、人間にいろいろ影響があります。  
⇒ 社会が早く発展するにつれて、人間にいろいろな影響が出てきます。
- 例9 子供の心理教育という問題ははっきり研究して解決することができないと思っています。  
⇒ 子供の心理についての問題は、よく研究しなければ解決することができないと思います。
- 例10 どうして少年犯罪はそんな形で出て、どんどん増えていくような気がします。  
⇒ どうして少年犯罪はそんな形で出たのでしょうか。これからもどんどん増えていくような気がします。

— 本学社会情報学部留学生 —

- 例11 両親は子供が育つとき、厳しく適当な教育が必要です。  
⇒ 両親は子供を育てるとき、適度に厳しい教育が必要です。
- 例12 クレジットカードができたとともに、各種犯罪も起こってきた。  
⇒ クレジットカードが普及するとともに、いろいろな犯罪も起きてきた。

例13 社会情勢は日に日に厳しさを増しつつ、自分の利益ばかり考えている人も多いただろう。

⇒ 社会情勢は日に日に厳しさを増している。一方で、自分の利益ばかり考えている人も多くなってきている。

例14 これは結婚したばかりの夫婦に対してとてもよいことだと思う。

⇒ これは結婚したばかりの夫婦にとって、とてもよいことだと思う。

例15 最初から別々に住んで、休みのときなど両方の両親に行って、親しく関係を保つことができると思う。

⇒ 最初から別々に住んでいても、休みのときなど両方の両親とこ  
ろに行けば、親しい関係を保つことができると思う。

例16 中国では人口数と仕事数が平衡になりません。

⇒ 中国では、人口と仕事のバランスが悪い。

例17 この制度を採用して、企業にも労働者にも長所である。

⇒ この制度を採用することは、企業にも労働者にも長所となる。

例18 幸せなことは好きな人と結婚して、家族のためにいろいろなことをやる。

⇒ 幸せなことは好きな人と結婚して、家族のためにいろいろやることだ。

これらの誤りはなぜ起こったのか。以下の四点にまとめられるだろう。

#### ① 語彙の選択の誤り

辞書を引き、運用面を考えずに使用したと思われる誤り（例1, 2）や、語彙そのものを誤って学習した誤用例が見られる（例6）。また、中国語の語彙から類推したと考えられる誤りもある（例8）。

#### ② 構文の誤り

学習した内容が正確に身につけていれば解決できる誤文が多く見られる（例3, 4, 5など）。接続の方法を誤ったために意味が分かりにくくなった誤文（例6, 15など）も、基本学習が正確にできていれば防げるものである。また、文をスターとさせたものの、うまく最終ゴールにたどり着けないという、いわゆるねじれ文（例10, 11, 13, 17, 18など）は、学生に「ねじれ



た文」を書いているという認識がないようである。考えながら書き進むうちに、出だしの部分を忘れ、思いつくままに書いてしまうようだ。これをなくすためには、常に自分の文がどの方向に進んでいるかを意識することが必要である。同時に、自分の書いた文がねじれていないかを確認する練習も欠かせない。

③ 複合的な誤り

最も多い誤りの型・誤りで（例 1～18）、語彙の誤り、構文の誤りが入り混じっているため、短い一文であるのに読み手に内容が伝わりにくい。

④ 文章のまとまりの有無

先に上げた学生の文例（文例 A～F）からも分かるように、短文を並べることができても、それを段落としてまとめ上げる力がないために、主題が不明な、ただだらしとした文章になっている。

#### 4. 本学留学生には何に重点を置いた教育が必要か

##### (1) 現在の教材に足りないもの

現在多く使用されている大学の留学生を対象にした文章教育の教材について、ここでもう一度整理すると、次の二つの柱から成り立っていることがわかる。

① 前提 — 求められる基礎日本語力の習得

大学入学前に1年から2年の日本語学習過程を終了していることが前提となって、教材が作られている。学生は少なくとも中級前期課程を終了しており、基礎的な作文が書ける力を持っていると考えられている。

② 目標 — レポートおよび答案作成

一般教養科目や専門科目で求められるレポートや定期試験での記述式問題に対応できる表現技術を身につけ、最終的には卒業時の論文作成のための基本的な表現技術を得ることを目標にしている。すなわち、短文作成の練習より、文の構成や形式を学習することが中心におかれている。

大学一年生を念頭においてのテキストの目標は正当である。大学での学習

に耐えるだけの日本語力を身につけて入学してきたが、その実力を「文章を書く」という面でまだ発揮できていない学生を対象にする場合は、大学生に求められる表現技術、つまりレポート作成や記述式問題の答案を書くことなどに焦点を絞って教育を進めていけばよい。ただし、学生の日本語力が十分にあるという前提が必要である。

実際には、大学での専門の学習をこなせるだけの日本語力が十分になくても入学しているのが現状である。学生の実力が無いのに、実施される授業レベルは高いという、バランスが悪いことが行われている場合もある。その原因の一つには、大学生であるから、レポート作成をしなければならない、従って、作成練習をしなければならないという教師側の思い込みもあるだろう。大学という枠の中で学生を迎えると、大学生であるという理由から、中級までの日本語力は十分持っているはずだと考え、実態に合っていない内容の授業が行われやすい。

こうした現状の中、学習現場で教える立場から見て、これまでの教材に再考が求められることは以下のような点である。

- ① 理解能力と運用能力に大きな隔たりがあることを考慮していない
- ② 基本項目が定着していないまま、上の段階に進んだ学生を対象にしている
- ③ よくある間違いをおかさないようにする練習が不足している
- ④ 学習目標とする項目立てはよいが、それを達成する練習が少ない
- ⑤ 学生が自分の間違いに気づくことを求めている
- ⑥ レポート作成などの形を整えることに重点が置かれ、正確な文を記すための練習が足りない
- ⑦ 初級の繰り返しのような練習によるのではなく、欠落した部分を補充し、既習の項目が整理できるような内容ではない

## (2) 教材と本学留学生の実力のギャップ

レポート作成までの実力がつくように構成された既存の教材を用いて、本学留学生の文章表現の授業に効果をあげるのは難しい。それは教材の求めるところが学生の実力とかけ離れているからである。教材と学生の実力とのギャップ

ブは以下のような事柄が原因で生じていると考えられる。

- ① 初級での文型が正確に定着していない。レベルが上がってもこれが改善されないまま来ている。— 徹底的な反復練習と学生の自覚が不足している
- ② 中級段階に進み、まとまった量の文章が書けるようになって、基本的な誤りが続いている。しかし、「ある程度まとまった分量が書けた」という事実で満足し、細かい部分の誤りが見逃されがちだ。— 分量で満足しやすい
- ③ 慣用句などを学習すると、誤った文脈の中で使われる場合が多く見られるようになる。しかし、学生はこうした「一つ上のレベルの表現」を用いることに満足を覚え、また、教師側も、教えた語句が文章の中に使われたという事実だけに目を奪われがちだ。— 慣用句を誤って用いると、意味の伝達がいっそう困難になる

### (3) 本学留学生への試み

すでに示してきた本学留学生の誤用例からも分かるように、正確な文を書くための訓練には以下の三点が基本であると考えた。

- ① 基本構文の習得・定着
- ② 適切な語彙の使い分け
- ③ 文章構成力の習得（正しい文の完結・場面の展開・的確な要約）

また、この基本項目のトレーニングのために、次の a～e の五点を到達目標として位置づけた。

- a 初級の語彙・基本構文を間違えずに使えること。— 初級で学習した項目・語彙だけで、十分に意図は伝えられる。
- b 分かりやすく正確な文を書くこと。— 間違いが多く、読み手に本意が伝わらない難解な文章より、平易ではあるが、適確に意図が伝わる文章の方が、コミュニケーションとしては成功している。
- c 間違いを認識し、同じ誤りを繰り返さないこと。— 何について間違えたかを意識するだけで、誤りが少なくなる。
- d 自分で間違いが見つけれられるようにすること。
- e 何のための練習かを常に意識して行うこと。

以上の基本をもとに、本学一年に在籍する留学生を対象に、次のような内容で文章表現技術の授業を試みた。

① 語彙選択についての練習

和語と漢語の使い分け  
言葉の言い換え、定義  
中立表現と感情表現

② 構文を定着させるための練習

複数の単語から文を組み立てる  
文意を変えずに言葉を並べ替える  
絵を見て説明する  
視点を変えて説明する  
事実を変えずに立場を変えて表現する  
わかりにくい文を訂正する  
ある物、人物について描写する

③ 文章構成に関する練習

ある場面を説明し、次の展開を考える  
指定された場面展開を行う  
接続の表現を使って、場面を展開させる  
事実に対して意見を書く

④ 正確に伝えるための練習

スタートした文を正しいゴールに完結させる  
ねじれ文を訂正する  
読んだ本、見た映画を要約してストーリーを書く  
意見文と事実を区別する  
速読をして要約する  
人の話を聞いて要約する

## 5. まとめと今後の課題

表現したいことが相手に正確に伝わるように、簡潔な文章を書くことは難しいことである。まして、日本語をコミュニケーション手段として学習して

## 大学一年次における留学生への作文教育

いる留学生にとってはなおさらのことである。一方、何を言い表したいのかわかりにくい文章を読むのは読む側にとっても困難である。日常的に留学生の書く日本語文にふれ、学生が意図する内容を推測しながら読んでいる日本語教師とちがひ、初めて留学生の書く文章に触れた場合、多くは考えていたより遥かにすばらしい文章に驚きを感じるか、あるいは、何を言いたいかわからず、困惑するかのいずれかであろう。

大学で学ぶために、留学生に求められる日本語力は当然高いものである。定期試験の記述式問題の解答を日本語で書く、資料を読み、レポートを書くなど、大学一年次の留学生が越えなければならない日本語のハードルは高い。確かに学生の文章力は要求されるレベルに達していないことが多い。もともと日本語力が大学での学習を支えるだけの段階に到達していないことがその一因ではあるが、原因の大半は、学習した日本語力が出し切れていないところにあるのではないだろうか。

では、学習したことをいかに思い出させるかということが問題になってくるが、留学生対象の文章表現の教材でこれを満たしているものはほとんどない。これから新たに学習項目を増やしていくという学生を対象にしたものか、あるいは、すでにあるレベルにまで到達した学生を対象にしているかのどちらかである。

課題をこなしていくうちに、忘れていた日本語構文を思い出し、何が自分に足りないかに気づくことができる、そうした教材の作成を目指して、現在、本学留学生対象の日本語表現技術の授業で教材を試行している。学習レベルはかなり高いが、持っている力が出し切れない学生、何度でも同じ間違いをおかす学生、的確な文章を書こうとする意欲が低い学生、相手にうまく理解してもらえないことよりも、文字量に満足してしまう学生など、こうした学生の学習にとって、現在試行している教材がどれほど役に立っているかはまだ検討の段階である。当面の目標は「自分で書いた文章の誤りに自ら気づく」というレベルに達することであるが、2年次に進んだとき、日本語で表現することに関して、どれほど学生の意識改革ができたか、1年次で学習したことがどれほどの効果をあげているか、今後の追跡が必要である。

### 参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2001)『大学・大学生の日本語④論文作成編』アルク
- 坂野永里, 他 (1999)『初級日本語げんきⅠ』ジャパントイムズ出版 265, 269
- 坂野永里, 他 (1999)『初級日本語げんきⅡ』ジャパントイムズ出版 265, 269
- 古郡廷治 (1999)『文章添削トレーニング』筑摩書房
- 浜田麻里, 平尾得子, 由井紀久子 (1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
- 倉八順子 (1997)『日本語の表現技術』古今書院
- 倉八順子 (2000)『日本語の作文技術中・上級』古今書院
- 門脇 薫, 西馬 薫 (1999)『みんなの日本語初級やさしい作文』スリーエーネットワーク
- 日本語教育・教材研究会 (1988)『日本語作文Ⅰ』専門教育出版 69, 87
- 日本語教育・教材研究会 (1988)『日本語作文Ⅱ』専門教育出版 33
- 日本語教育・教材研究会 (1989)『絵入り日本語作文入門』専門教育出版
- 二通信子, 工藤嘉名子 (2003)『留学生のための論理的な文章の書き方〔改訂版〕』スリーエーネットワーク
- 小笠原喜康 (2002)『大学生のためのレポート・論文術』講談社
- 佐藤政光, 他 (1986)『実践 にほんごの作文』凡人社
- 産能短期大学日本語教育研究室 (1990)『大学生のための日本語』産能大学出版部
- 佐々木瑞枝, 他 (2001)『大学で学ぶためのアカデミック・ジャパニーズ』ジャパントイムズ